國學院大學学術情報リポジトリ

ウルフ受容を考える：小説、及び、映画『めぐりあう時間たち』を中心に

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 大熊, 光子, Okuma, Mitsuko
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000019

ウルフ受容を考える
—小説、及び、映画『めぐりあう時間たち』[1] を中心に—

大熊光子

1. はじめに

ヴァージニア・ウルフが世を去って（1941年）から間もなく四分の三世紀となり、小説『ダロウェイ夫人』（1925年）に通底して流れるテーマの一つ（第一次）大戦[2] については、今年2014年、開戦100年の記念式典が行われた[3] のをみると、『ダロウェイ夫人』から流れた時間の長さを思わずにはいられない。

一方、すでに数ある翻訳に加えて、1955年角川文庫版『ダロウェイ夫人』が、映画『めぐりあう時間たち』の広告写真を帯に巻いて再版され、さらにまた、つい最近（2010年）、その新訳が加えられた日本、一方、アメリカにおいては、ウルフの作品は読まなくても（敬遠しても？）、その表題ゆえに、作者名はよく知られたであろう、エドワード・オールビーの戯曲『ヴァージニア・ウルフなんかこわくない』（1962）に加えて、エリザベス・テイラー、リチャード・バートン主演による映画化（1966）というウルフ受容[4] は、さらに、作者の名前どころか、その作品の一時的な売り上げの好調をみたという『ダロウェイ夫人』受容につながったピューリッツァ賞受賞カニンガム作品『めぐりあう時間たち』（1998年）が生まれ、加えて、その映画化（2002年）によって、アカデミー賞を始めとする映画賞の様々な部門賞受賞という状況が引き起こされたことは、『ダロウェイ夫人』から流れた時間は、単なる物理的長さを超える時間でもあることを示しているのではないだろうか。

以上のような、ウルフの今の時代における受容のありようを、『ダロウェイ夫人』と、小説と映画『めぐり合う時間たち』を中心に検証し、そこから浮かび上がるものをふまえて、『ダロウェイ夫人』、ひいては、これから先のウルフ受容についても考えてみたいというのが、この小論の目指すものである。

2.『ダロウェイ夫人』と小説『めぐりあう時間たち』

ウルフにとって、大西洋を越えて同時に出版された最初の作品という『ダロウェイ夫人』にならって、まずは、小説『めぐりあう時間たち』に寄せられた英米の賛辞を見てみよう。最初は、イギリスから。「・・・この作品の出版社は、『ダロウェイ夫人』の知識は、前提必須条件ではないと言っているが、私が感じるには — 感じることは、『めぐりあう時間たち』を読む効果的な手段であるのだが — それ無しには、この小説は成り立たない。だから・・・カニンガムの雄弁な小説を読み、『ダロウェイ夫人』を読み、そしてまた、この、ヴァージニア・ウルフが喜ぶだろう賛辞（『めぐりあう時間たち』）—括弧内筆者付加—を、静かに楽しむことへと、ひっそりと戻っていくことをお薦めする。」(5) 続いて、アメリカから。「『めぐりあう時間たち』を読む前に、『ダロウェイ夫人』を読む必要はないし、ペダンチック（！、感嘆符筆者挿入）な比較検討をいくら積み重ねても、すでに、この作品を理解していなければ、その助けにはならないのだ。ただし、この二作品の関連は・・・とても密接で、とらえがたく、型破りなものなので、『めぐりあう時間たち』を読んだあとで『ダロウェイ夫人』を読まないのは、すぐにも手に入る楽しみを手放してしまうという、実にひどいことのよう思える — それはまるで、今まさに、変奏曲が佳境に入ろうとしているさなかに、コンサート会場をあとにするかのように。」(6) さて、読んでから読むか？読まずに読むか？いずれにしろ、両者は読まれなければならない、大西洋を挟んで眺めている地点は異なるが、上記の評者たちの一致点は明らかである。この作品は、『ダロウェイ夫人』無しには成立し得なかったものであり、その逆は、当然のことながらあり得ない。

カニンガムの『ダロウェイ夫人』を取り込む仕掛けは実に巧みである。ウルフ研究者には周知の原題をタイトルに用い、邦訳副題“三人のダロウェイ夫人”とは、『ダロウェイ夫人』を書いている、『ダロウェイ夫人』を読んでいる、ダロウェイ夫人と呼ばれている三人、というわけだ。そして、その三人について交互に語られる各章は、それぞれ、ウルフ夫人（書いている）、ブラウン夫人（読んでいる）、ダロウェイ夫人（呼ばれている）（括弧内は、筆者が付加）と銘打たれている。すなわち、実は、ダロウェイ夫人そのものは登場せず、時折挿入される『ダロウェイ夫人』からの引用に、わずかに、その実像を見せるだけである。その結果、『ダロウェイ夫人』への興味がかきたてられ、さらには、ウルフその人への関心も呼びさまされたことは想像に難くないし、それはまた、ウルフへの思い入れも並々ならぬカニンガムの望むところでもあっただろう。

では、巧みにつなぎ合わされた二つの作品の共通点と相違点について眺めてみよう。まず、すぐにも目につくのは、登場人物の名前である。ダロウェイ夫人の夫リチャードは、クラリッサ・ヴォーン（『めぐりあう時間たち』のダロウェイ

夫人）の元恋人で、今まさにエイズにより瀕死の状態にあるのだが、クラリッサの世話により何とか生きながらえている人物の名前、その彼女が、現在、共に暮らしている恋人サリーは、ウルフのダロウェイ夫人が、かつて恋心を抱いたサリー・シートンと同名、さらに、『ダロウェイ夫人』の脇筋の主人公で、シェルショック（戦争神経症）に悩む青年セプティマスは、何とかして彼に寄り添おうとする妻レイツィアの面前で、アパートの部屋からの投身自殺を遂げるのだが、クラリッサ・ヴォーンのリチャードも、彼女の眼の前で、アパートの窓枠からするりと身を滑らせてこの世を去る。ダロウェイ夫人には、一人娘エリザベス、クラリッサ・ヴォーンにはジュリア、名前は違うが、こちらも一人娘。なお、この名前は、ウルフの母の名前である、というのは『めぐりあう時間たち』邦訳者の指摘だが、そこには、ウルフにとっての母が、その不在を含めて大きな存在であったことを考えさせずにはおかないし、ウルフ次作『灯台へ』におけるラムゼー夫人のモデルといわれていることも思い出される。ただ、エリザベスの父親は、まぎれもなく、リチャード・ダロウェイだが、ジュリアの父は、「ごめんね、ジュリア、あなたの父親は、番号のついた試験管の中で、見つけようがないのよ」(7) というように、人工授精によって授かった子供である。また、エリザベスには、家庭教師ドリス・キルマン、ジュリアには、メアリ・クルル、というどちらも母親が気に入らぬ女性が配されているが、その結びつきの実態は、決して同じではない。といったところで、相違点の方に眼を移してみよう。

『ダロウェイ夫人』の背景は、第一次大戦の記憶も新しい20世紀初頭、それに対して、同じバックグランドを持つのは、『めぐりあう時間』においては、ウルフ夫人の部分のみ、ブラウン夫人の章は1949年（映画では、1951年）、ダロウェイ夫人の章は20世紀末（映画では、2001年、これはまた、今を生きる私たちにとっては、9・11の年として記憶される年だが）、従って、シェルショックに悩むセプティマスの戦争は、第一次世界大戦だが、ブラウン夫人の戦争帰りの夫ダンにとっての戦争は、第二次世界大戦である。その彼が、名前を間違えられて死んだと思われた二日後に生きていることが判明し、戦争の英雄として帰還したのは、ほんの5年にもならぬ前で、それはまるで「彼がよみがえったよう」であり、「以前のままの優しい、以前のままの匂いのする存在として、死人の国（聞かされるのはイタリアやサイパンや沖縄、むしろ捕虜となるよりはと、自分の子供を殺し、自分の命も絶った日本の母親たちの話）から帰還したのだ。」(8) そこにはセプティマスのような戦争の傷跡は語られず、ロサンゼルス郊外の裕福な生活、息子一人に妻の体内には二番目の子供（もちろん、彼の人生はそれで終わらず、二番目の子供出産のあとの妻の出奔、自身のガン死、娘の自動車事故死、息子は自死と言う展開が、その後の彼を待ち受けているのだが、もちろん、それは、1951年の彼のあずかり知らぬことである）、という状態は、同じ戦地帰りながら、『ダロウェイ夫人』における、親友エヴァンスの戦死を目の当たりにして以来のシェル

ショックで、何も感じられなくなったことに苦しむセプティマスとの接点は見いだせない。

一方、『めぐりあう時間』において、大きく語られるのが同性愛、両性愛、そしてエイズの問題である。この点に関しては、小説そのものではないが、脚本『めぐりあう時間』についてデヴィッド・ヘアが述べたことに、イギリスのフェミニスト、ミシェール・バレットが苦言を呈している。曰く、デヴィッドが、脚本の序文に、エイズの惨禍は、第一次世界大戦の惨禍とパラレルなものとして提示したと述べていることに腹を立て、その二つは、決して、並置されるものではないと主張している。その上で、『ダロウェイ夫人』の政治的主題の中心は、カニンガム作品においては、「異なる政治的状況のために、性的選択の暗示についての考察に移った」(9) のだというのが彼女の論であるのだが。たしかに、同性愛の問題については、『ダロウェイ夫人』においても、クラリッサ・パーリー（ダロウェイ夫人の旧姓）のサリー・シートンへの思いとして描かれるが、同じサリーと同じクラリッサ・ヴォーンとの関係の差は、はるかに大きいし、そのクラリッサの元恋人リチャードに始まり、その恋人ルイス、また、そのルイスの新しい恋人、また、リチャードのパーティに来る予定の、また別の同性愛カップル等々、『ダロウェイ夫人』においてのサリーが、いまや、5人の子持ちのマンチェスターの工場主夫人に収まって、その彼女を、ロンドンはウエストミンスター地区に住む、国会議員リチャードの妻クラリッサは、決して訪ねようとはしないでいるのとは比べようもない世界が語られる。そこには、もちろん、同性愛の問題だけではなく、階級、地域、出自、といった問題も絡んでいるのだが。そしてまた、同性愛に付随する問題としてのエイズ、1980年代になって注目を浴びる存在として人類の世界に登場してきたこの病は、ウルフ（に限らず、20世紀初頭の人々）には未知の存在であったのは言うまでもないだろう。

3. 小説『めぐりあう時間たち』と映画『めぐりあう時間たち』

さて、バレットが不同意を示したヘア脚本による映画『めぐりあう時間たち』では、どのような事態が起こったか？映画公開は、まず、2002年12月、ロスアンジェルスとニューヨークにおいて限定的に公開され、全米公開は2003年1月、一方、イギリスにおいて公開されたのは、さらに遅れて2003年2月、というわけで、小説『ダロウェイ夫人』のような英米同時公開ということにはならなかったようだ。これは、脚本も監督もイギリスであるが、原作、映画製作、出演陣もおおむねアメリカ（ウルフの召使ネリー役のイギリス人女優は忘れてはならないが）であり、ハリウッド映画として製作されたことにもよるのだろう。あるいはまた、その背景に否定しがたく存在しているウルフを考慮に入れても、原作の舞台（ロンドン対ロサンジェルス、ニューヨーク）も登場人物（ウルフ対ローラ・ブラウ

ンとクラリッサ・ヴォーン）も、大西洋をはさんで1対2という割合であることも思い出されるところである。

ここで、小説にならって、映画評のいくつかをのぞいてみよう。これは、小説に関する反応が、主に、『ダロウェイ夫人』との関係において論じられていたのに対し、原作と、その映画化、ということで必然的に生起してくる問題、つまり、ジャンルの変更によって起きてくる問題、という点において論じられているのは、当然といえば当然であろう。また、文学作品の映像化は、つねに、原作との比較において論じられ、『ダロウェイ夫人』と小説『めぐりあう時間たち』との間に生じた、読んでから読むか、読まずに読むか、の問題は、この場合、見てから読むか、読んでから見るか、というのが主たる問題である。そして、この映画には、より問題を複雑にする点が存在する。それは、ウルフという実在の人物を映像として提示していることである。勿論、ウルフをめぐるおびただしい数の映像があふれかえっているにしても、実在のウルフを知る人は今や、ほんの少数に過ぎず、その実像の真偽をめぐる議論は決着のつけようがないのだが。

まずは、小説との関連についての映画評をみてみよう。カニンガムの小説を、「偉大な作品からの、ちっぽけで意義のない逸脱」(10) と決めつけたウルフ学者ジェーン・マーカスは、さらに、「映画も小説と同じく、『ダロウェイ夫人』の重層的な特質をとらえていない」(11) と手厳しい。筆者も、『ダロウェイ夫人』から『歳月』、『幕間』へと至る、ウルフの実に壮大な時間の重層的とらえ方から見ると、カニンガム作品の“層の薄さ”は気になるところであり、小論“「ダロウェイ夫人の歳月」から『幕間』」へ”、（國學院雑誌第103巻第6号所収）において、指摘したのだが。当時はまだ、映画バージョンは公開されておらず、作品名も『時間』として取り上げた。しかし、このような、特に、ウルフ研究者たちにとって、映画におけるウルフ像は我慢がならなかったようで、「ウルフの素晴らしさが、実に醜い鼻によって徹底的に損なわれた愚か者」(12) とされており、「神経質で、自殺志向の、召使につらくあたる女性として誤って描かれたこと」(13) を批判しているのは、ブレンダ・シルヴァーである。文学作品の映画化は、良きにつけ悪しきにつけおおむね論議を呼ぶものであるが、この場合、カニンガムの小説の中に、ウルフという実在の人物が登場し、さらに加えてその映像化がなされたことに、なんといっても議論の中心が置かれてしまうのは致し方のないことでもあろう。脚本化にあたって、カニンガムは、まったくのフリーハンドをヘアに与えた、とされるが、映像化へのコミットメントの限界を予期してのことだったのではなかろうか。

さて、賛否半ばする映画『めぐりあう時間たち』であるが、ここで、小説と映画の違いを個別にみてみよう。まず、小説と映画の乖離の一つとして注目されるのは、クラリッサ・ヴォーンの娘ジュリアの扱いである。小説『めぐりあう時間たち』に色濃く影を落とす同性愛問題は、もちろん、ジュリアとその女友達メア

リ・クルルに対する、母クラリッサ・ヴォーンの眼差しが、『ダロウェイ夫人』におけるダロウェイ夫人の娘エリザベスとドリス・キルマンに対する彼女の不満というエピソードを彷彿とさせるものとして語られているのだが、映画においては、その点はまったく捨て去られ、父親を告げられないことから、何か、娘に対して引け目を感じているようなクラリッサに対して、ジュリアの方はといえば、母とサリーと自分という女だけの世界に自然に溶け込み、むしろ、母を支える孝行娘のような描かれ方となっている。これは、元恋人リチャードの死によって、ダロウェイ夫人と呼ばれることもなくなったクラリッサ・ヴォーンの新しい人生、すなわち、クラリッサ、彼女のパートナー・サリー、彼女の子供ジュリア、さらには、彼女の母にもあたる世代のブラウン夫人、といった、たんなる血縁関係によってのみつながっているのではない、しかも、同性のみの、新しい形の家族を暗示しているようにも見えて、その点においては、この映画がウルフ『ダロウェイ夫人』の世界から、さらに変容した性、及び、家族の姿を、小説よりも鮮明に表している変化ともいえるかもしれない。

次に、取り上げたいのは、ブラウン夫人についてである。邦訳氏は、「訳者としては、とくにミセス・ブラウンのストーリーが与えてくれた感動を楽しんだことを告白しなければならない」(14) と記しているが、筆者が、映画において、もっとも違和感を抱いたのは、彼女の映像である。それは、映画化によって、作中人物のイメージが、もっとも変化させられているという点においてだが。その検証には、まず、小説において描かれているミセス・ブラウンの人物像を見てみよう。取り違えの戦死から劇的に蘇り、カリフォルニアへの帰還を果たしたゆえか、並外れた英雄として迎えられたダン・ブラウンは、彼の母も言うように、どんな相手でも手に入っただろうに、彼が選んだのは、「自分の親友の姉で本の虫」という手近で地味な存在、そして、その外見はといえば、「寄り目の黒目にローマ風の鼻が外国人のような印象を与え、言い寄られたことも愛されたこともない、いつも一人で本を読んでいる」(15) ローラ、演じるはジュリアン・ムーア、残念ながら、ウルフ演じるキッドマンとは、異なる意味においてだが、行間から読者が抱くイメージには程遠いことは否めない。また、その彼女が抱く苦悩は、どうだろう。死の世界からの蘇りの気配はみじんも感じさせず、「僕のかわいい本の虫ちゃんへ、と誕生日プレゼントに銀のしおりを送ってくれる夫ダン」(16)、幼児を抱えた上に身重の妻を気遣って寝坊させ、自らは早起きして“自分”の誕生日の花を買い（この「花を買う」行為はまた、『ダロウェイ夫人』を思い出させるのだが)、幼い息子と自分の朝食を用意する夫ダン、3歳ながら、母親の意を迎えようと実に健気な息子リチャード、さらに、もう一人増えようとしている家族、そこから、なんとしてでも逃れようとするローラを実感をもって理解することは読者にも映画の観客にも、なかなか困難である。その点については、前出訳者も、「彼女は、どうしてあれほどまでに『ダロウェイ夫人』の世界に浸ろうとするのか。

子供を預け、ホテルの部屋を借りてまで。」[17] との疑問を投げかける。この疑問は、映画版においては、ホテルにもちこむ薬物（自死のための？）まで加えられていることで、その度合いをさらに高めこそすれ、答への糸口は、ますます見えなくなる結果を生む。そこで、この小論においては、ブラウン夫人の名前の由来と思われるものを手がかりに、ウルフの他の書き物にも目配りしながら、その答えの一つを探ってみることとする。

4. 映画『めぐりあう時間たち』から、再び、『ダロウェイ夫人』へ

ブラウン夫人、この名前の由来は、『ダロウェイ夫人』に探っても見つからないが、ウルフ読者なら自明の『ベネット氏とブラウン夫人』の彼女を、まず思い浮かべるであろう。では、時の大御所であったエドワード朝作家たちに対して、高らかに宣言したウルフによるこの小説論、ここに登場するブラウン夫人は、『めぐりあう時間たち』のブラウン夫人とは、どのように響きあうのか、その点については、そのブラウン夫人が、上掲の論において、どのような存在として登場しているのか確認してみよう。「ブラウンとか、スミスとか、または、ジョーンズとかいう人が・・・」[18] そう、ブラウン、という名前は、一つの典型として使われていて、作家に性格描写を迫る、普通の人物に、たまたま与えられた名前であって、カニンガム作品において容易に見つかる、ウルフ作品からの借用の名前探しの埒外であり[19]、ブラウン夫人でも、スミス夫人でも、はたまたジョーンズ夫人でもよかった彼女は、普通の、20世紀半ばのアメリカの豊かな生活を享受する妻であり母である存在なのだ。だが、もちろん、そこにはやはり、ブラウン夫人の存在を規定する特性があることを忘れてはいけない。それは、まさに、普通の彼女を、普通ではない人生へと駆り立てていったもの、それはすなわち、彼女が読む女、であったことである。ほんのわずかでもいいから、一人になって、思う存分、読みたい、この情熱の強さこそがブラウ夫人を駆り立て、ついには、子供、夫、家庭を捨て、トロントの図書館司書という、まさに読む女に最適な居場所を得ることになるのだ。

読むこと、それは、そんなにまで人間を駆り立てるものなのか、この答は、カニンガム作品においては、書く女、としてしか登場していないウルフだが、実は、彼女にとって読むことは、まさに書くことと同じ意味を持つものであったことをみることによって理解される。この点については、カニンガムが、『めぐりあう時間たち』執筆において、ウルフにまつわる事実の出典として挙げた参考文献の一つ、ハーマイオニー・リーによるウルフの伝記の“読書”という一章において、実に詳しく検証されている[20] が、そこからも、ブラウン夫人というカニンガムの命名は、普通の人生を送る女性が持つ“読む”ことの意味を伝えたいがために付与したことが納得できるはずである。さらにまた、匿名による書評を“書く”

ことから書く女としての人生を始めたウルフの原点は、まさに、“読む”ことであり、優れたエッセーの書き手でもあったウルフが、読み手としての書き物を集めたものを、上下2巻にわたって出版したのが『普通の読者』(21) であったことも、同時に思い出されるであろう。そして、子供を預け、その筋の女性と間違われないかと「夫は、あとから来ます、荷物も」と必死の言い訳のもと、びくびくしながらホテルの部屋を借りてまでひねり出した一人の時間に“読む”ブラウン夫人の姿には、『自分だけの部屋』（1928年）において、女性が、ものを書こうとするならば、自分だけの部屋と年500ポンドの収入がなければならない、と言ったウルフの言葉もまた、思い出されるのだ。自分だけの空間、自分だけの収入、書くのに必要なそれらは、もちろん、書くことの前提である読むことにも通じるわけであり、普通の読者ブラウン夫人の出奔は、まさに、その線上にあったのだ。

さて、ブラウン夫人が読む女であるのに対し、ダロウェイ夫人は、招く女、とでも言えようか。ウルフにおける彼女が人々を招いてパーティーを開くことは、彼女の人生そのものとでもいえることであり、だれを招くか、その取捨選択に心を砕くさまは、カニンガム描くダロウェイ夫人、クラリッサ・ヴォーンも同じである。勿論、20世紀初頭の国会議員夫人のパーティーは、せめて、花は自分で買うにしても、あとは、ウルフと召使ネリーの関係(22) とは比べようもなく良好な関係にある召使まかせに対して、20世紀末、ニューヨークのクラリッサは、花を買うのも自分が当たり前、家具を動かしてスペースを作り、料理の準備だって彼女一人がおこなうのだが。そして、この招く女のイメージは、『めぐりあう時間たち』において、クラリッサ・ヴォーンにとどまらないことも指摘しておこう。書く女ウルフも、読む女ブラウン夫人も、小さいながら、人を招いての宴を控えている招く女でもある。ウルフは、姉と子供たちをお茶に、ブラウン夫人は夫と子供とともに祝う夫の誕生パーティー。しかし､招く女としての結末はといえば、ウルフのダロウェイ夫人の上首尾に対して、ウルフのお茶会は、姉たちの早過ぎる到着に加えて、お茶のためのウルフ夫人からの突然の買い物依頼に、いつにもまして不機嫌になるネリーという具合、一方、カニンガムのダロエウェイ夫人のパーティーは、これ以上の惨憺たる結末はあるまいと思われる、パーティーの主役リチャードの自殺によって突然の中止、そして、ブラウン家は、とのぞいて見れば、ケーキも作り直し、ホテルへの短い出奔の痕跡など見事に拭われたように、何事もなく祝われた誕生日の夜、ダンのベッドからの呼びかけ「もう、やすむかい？」は、ブラウン夫人の、なんとしでも読みたいという欲求にあらがう力は無く、むなしく繰り返されるばかりなのだ。

5.『ダロウェイ夫人』結末と『めぐりあう時間たち』最終章

さて、これまで、『ダロウェイ夫人』、及び、小説･映画『めぐりあう時間たち』

相互の様々な類似点、相違点を眺めてきたが、最後に三者の比較に、決定的破綻をきたすのが、『めぐりあう時間たち』の最終章である。その中身は、小説・映画相互において少々の相違点はあるが、それらも超えて『めぐりあう時間たち』の他の章とは全く様相を呈することとなる。カニンガムが、ウルフ『ダロウェイ夫人』から巧みに取り込んだ様々な要素に加えて、作品の構造として取り入れたものは、登場人物を、ある一日に絞って描く、ということであった。そして、それは、その一日に、もちろん、その一日にはとどまらない重層的な時間を描きこんでいく、というのがウルフの企みでもあり、その踏襲を試みたのがカニンガム作品であることは疑いもないであろう、少なくとも最終章までは。

最終章、タイトルはダロウェイ夫人、なのに、突然、登場するブラウン夫人、これは、どういうことか？もちろん、プロットの展開としては、リチャードの死を、ダロウェイ夫人が、自分の行為の是非を疑いながらも、幼い息子を置いて出奔したブラウン夫人に知らせたことでの登場であって、息子の死に、昔の自分の行為の責めを自覚しつつもやってくる母親、というのは、決して、説得力のないことではない。だが、作品の構造としては、どうだろうか？ブラウン夫人の一日とダロウェイ夫人の一日が、半世紀の時を超えて、突然、重なるのだ。ここで、それまで、破綻なく語られてきた三人のダロウェイ夫人の、それぞれの一日の物語は、終りを告げる。だが、そこで、カニンガムは、見事にその破綻を繕う。「そして、ここに彼女はいるのだ、クラリッサが、もはやダロウェイ夫人ではない、彼女自身が、だって、彼女を、そう呼ぶ人は、もういないのだから。そして、彼女の前には、また新しいこれからの時があるのだ。」(23) そう、カニンガムのダロウェイ夫人は、リチャードの死とともに消えたのだ。ならば、もういないダロウェイ夫人の章に、ブラウン夫人がいることは許されるのだろう。そして、ダロウェイ夫人はいなくなったが、クラリッサ・ヴォーンは、もちろんまだ存在し、彼女の時間は、まだ、これからも続いていく。「どうぞ、お入りください、ブラウン夫人、準備ができました。」(24) 最終章、最終行、ダロウェイ夫人ではなくなったが、いや、正確に言えば、ダロウェイ夫人とは呼ばれなくなったが、クラリッサ・ヴォーンという女性に変わりはなく、リチャードの文学賞受章祝賀パーティーは開けなくなったけれど、サリーとジュリアが準備し、招き入れられるのは、リチャードの母ブラウン夫人、招かれる先は、クラリッサとサリーとジュリアとブラウン夫人の4人で開く夜食のパーティー、そこに供されるのは、リチャードのパーティーに向けて、彼の好物も入れて、クラリッサが作った50人からの客のための大ご馳走の残り物、なくなったリチャードも、それを、たった四人の宴で食べられるのを喜ぶだろう、とのクラリッサやブラウン夫人の言葉のもとに。(25)

さて、本章に、『ダロウェイ夫人』結末と題したが、実は、結末という言葉は的を射てはいまい。それは、ダロウェイ夫人の一日の終わり、さらに言えば、「花は、自分で買ってくるわ」との彼女の言葉で始まった、ダロウェイ夫人開催のパー

ティーの終わりでしかない。最後の数行を見てみよう。「私を、こんなにも並々ならぬ興奮で包むものはなんだろう？それは、クラリッサだ、と彼は言った。だって、そこにクラリッサがいたから。」(26) そう、クラリッサは、そこにいて、まだ、これからもいるだろう、なぜなら、人は生きている限り、そのように時間は続いていくのだから。そして、その時間の重なりに、つながりに、人の生は存在する。そして、カニンガムの終わりには、本稿3章において先述したように、生き残った、クラリッサ、サリー、ジュリア、ローラ（ここでは、もう、ブラウン夫人と呼ばなくてもいいだろう。なぜなら、普通の、読む女だったブラウン夫人が、その読む情熱のために、普通ではない人生を送ることとなり、もはや、夫も娘も息子もいなくなった一人の老齢の女性として登場しているのだから）の4人の前にもこれからの時間があるのだ。ここに、『ダロウェイ夫人』からの様々な投影をうかがわせながら、最後には、カニンガムの作品に『時間』（『めぐりあう時間たち』）というウルフ作品の原題を冠した意味も見えてくる。すなわち、カニンガムのウルフ受容の眼目は、ウルフから流れた時間、そして、彼の、ひいては、我々の眼前にある時間、そして、それはまた、その先へと続いていく時間だったといえるのではないか。

6. 終わりに

さて、『ダロウェイ夫人』から、小説『めぐりあう時間たち』へ、さらに、映画『めぐりあう時間たち』へ、そしてまた、『ダロウェイ夫人』へとめぐる中で、常につきまとうのはウルフ像の問題であった。カニンガムの作品の中にとりこまれ、さらに、その映画化において、より鮮明に具体的に描かれたウルフ像は、カニンガムvsウルフ、という単に文学上の問題ではない、様々な問題を引き起こしてしまったことは否めない事実である。それは、「女性の創造者というものは、いつも、眉根を寄せて歩き回っている、という、よく言われる常套句を再生産し・・・いまや、アメリカの5千万もの映画の観客は、ヴァージニア・ウルフを、入水自殺を図り茶色の衣服を着ていた女性と思うことになる」(27) のか、いずれにしろ、「映画『めぐりあう時間たち』は、一種の伝記映画であって、ウルフの生涯を描いた一つであることは、多かれ少なかれ、大方の認めることなのだ。」(28) しかし、それは、永遠に続くことなのだろうか。「彼女を、また、彼女の人生の事実を、だれも所有することはできないし、彼女は、新しい改作者に、読者に、編集者に、批評家に、伝記作者によって、繰り返し、新しく作り変えられるのだから」(29) という、カニンガムも参考にした、実に大部なウルフの伝記を書いたハーマイオニー・リーの言葉の説得力は確かである。「たしかに、“彼女の鼻”は、最も最近の、最も人に知られた彼女の化身だが、彼女がそのもとに、永遠にとどまることは決してないのだ。」(30) から。

最後に、インディゴ・ガールズが、その名も『ヴァージニア・ウルフ』の中で歌っているように、ウルフからの、小瓶に詰められたメッセージが、また浪間より浮かび上がって、誰かの手に渡り、それを読んだ誰かによって、また、誰かに伝えられていくことを信じて[31]、そしてまた、「ウルフは、今もなお読まれ、論じられている」[32] という、その言葉通りの事態を引き起こした当事者のカニンガムや、「ヴァージニア・ウルフという作家は、何度読んでも、十分にわかった気がしない、しかし、読み返すたびに新しい発見のある作家である。」[33] という最近訳の解説者の言も思い出しつつ、ひとつのウルフ受容の検証を試みたこの小論を閉じることとする。

注

（1）『ダロウェイ夫人』（Mrs. Dalloway）という題名で発表する前に、ウルフの頭には、『時間』（The Hours）という仮の題名があったことは、よく知られており、カニンガムは、その事情を示すウルフの日記からの引用をエピグラフに掲げた上で、その仮題を作品名として、そのまま使ったのだが、その原語に『めぐり合う時間たち』という邦訳が与えられたのは、カニンガム作品が同名のタイトルによって映画化され、その映画公開時の邦訳タイトルによるもので、それまでは、ウルフの研究書においても、The Hoursには、『時間』という邦訳しか与えられていない。たしかに、The Hoursという複数形の邦訳に、“めぐり合う”という語頭と“たち”という語尾をつけたのは、The Years に対する『歳月』のような、複数形のない日本語にふさわしい訳語がなかった上での工夫であろう。なお、高橋和久訳（2003年）には、副題として、三人のダロウェイ夫人、が添えられている。一方、Virginia Woolf and the Real World, Alex Zwerdling, University of California Press, 1986, p.138によれば、さらなる仮題として、The Life of a LadyやA Lady of Fashionがあり、そのどちらにもあるa ladyという語に、Mrs. Dallowayという人格が与えられたことはウルフの以前の作品からの進歩と、上掲論者はみているようだ。

（2）1920年代、大戦と言えば第一次世界大戦のことで、いうまでもなく、第一次、というナンバリングは、第二次が勃発したことによってなされたものである。そして、ウルフと第二次大戦の距離は、ユダヤ人の夫とともにナチスのリストに名前があがっており、連日のロンドンへの空襲によって、ようやく果たしたリッチモンドからの転居先も爆撃されたというほど、『ダロウェイ夫人』執筆時とは比べようもなく近づいており、そのさなかに、ウルフの自死はある。

（3）この式典のニュース映像を見て思うのは、先の大戦、という物言いは、われわれ日本人にとっては、第二次大戦、太平洋戦争であり、ヨーロッパの人々にとっては、まずは、あくまでも第一次大戦であり、その、さらなる悪化の展開として第二次大戦があるのだということである。それはまた、『ダロウェイ夫人』に色濃く影を落とす、世界で初めての大戦から、ナチスの脅威の迫る日々を描きだした『歳月』、さらには、自死によって未完に終わった『幕間』までに渡って、人類の歴史に付きまとう戦争、そして、その根源たる暴力について考え続けウルフにおいても同様であったのだ。（なお、その点については、小論“「ダロウェイ夫人の歳月」から『幕間』へ”、國學院雑誌第103巻題6号において論じた。）さらに、本稿においては、ほとんど触れることができなかった、フェミニストとしての側面に加えて、平和主義者としての彼女を世に問うた評論『三ギニー』（1938）は、表面的には、第三次世

界大戦こそ、かろうじて避けられているようにみえるが、世界のどこかで日常的に起こっている争いと暴力の現代にこそ、また、人々に読まれるべきものである。

（4）松本朗氏によれば、「難解な小説を書くイギリスのエリート作家」という意味でウルフに言及したもっとも初期の例（『ダロウェイ夫人』、土屋政雄訳、光文社古典新訳文庫、2010、346頁）とされるが、ウルフの名前の引用は、まず、第一義的には、wolf とWoolfの掛詞である一方で、オルビー作品には、どこをどうみても、ウルフ（Woolf）への直接的な言及はない、という、一ウルフ研究者の言もまた正しい。実際、オルビー作品における、実に怖い存在といえば、体型を変えてまで出演したというエリザベステーラーの怪演ともいえる熱演が印象に残るマーサだが、その人物像には、体型は言うまでもなく、たいへんな商業的ヒットにも関わらず、その年のピューリッツア賞の授賞決定委員会が選定を渋った（『ヴァージニア・ウルフなんかこわくない』鳴海四郎訳、解説「邪魔者登場」一之瀬和夫、ハヤカワ演劇文庫、299頁）という罵詈雑言、卑語の数々をまくし立てることから言っても、ウルフとの共通点はどこにもない。むしろ、芝居の最後、「ヴァージニア・ウルフが怖いのはだれ？だれも、ヴァージニア・ウルフなんか怖くないよ」と歌いながら問いかける夫ジョージに、「わ、た、し・・・ジョージ・・・怖いのは・・・わ、た、し・・・」と答えるマーサ（Who's Afraid of Virginia Woolf?, Edward Albee, New American Library, revised by the author, 2005, p.257）のセリフから、怖い対象は、決して彼女ではないことは、明らかだ。ちなみに、ロンドンはアポロ劇場での2006年公演は、マーサ役にKathleen Turner、その演技により2005年のトニー賞を受賞したBill Irwinがジョージという、映画版に劣らぬ名声を誇るカップルによるものだったが、互いの生傷に、さらに塩を塗りこむがごとき夫婦のブラックコメディに詰めかけたのは、当方のような異国の研究者も混じるなか、穏やかに年老いて、芝居の世界に飛び交う“お上品”な言葉など、決して口にすることはあるまい、と思われるイギリス人カップルたちが少なくなかったことは、実に印象的だった。これもまた、今日のイギリスにおけるウルフ受容の一つということかもしれないが。さらに、アメリカでの受容について、ウルフの第一作『船出』につけたカニンガム序文においての彼の説明も興味深い。「この映画（エリザベス・テイラーとリチャード・バートンによるオルビー作品の映画化）は、ウルフの書いたものなど一語たりとも読んだことがないばかりでなく、彼女（ウルフ）が、実在の人物かどうかも全く知らないし、たとえ、それを知っていたとしても、彼女が何をして、彼女の名前にちなんだ芝居や映画ができるほど有名になったのかもわからない多くの人々に彼女の名前を知らしめた。」（The Voyage Out, Virginia Woolf, introduction by Michael Cunningham, 2001, Modern Library Classics, p.xxxvi）この序文は、もちろん、『船出』について付けられたものだが、その作品論としてだけでなく、カニンガムのウルフ受容をたどる上でも興味深い。

（5）Financial Times、（6）New York Times　（5）、（6）ともに、The Hours, Michael Cunningham, Harper Perennial 2006 所収。上記以外には、イギリス側からとして、Observer, The Times, Guardian, Independent Sunday　などから、アメリカ側からとしては、Los Angeles Times, Washington Post　からの書評も。また、The Hours, Picador USA, 2003には、アメリカからの賛辞のみだが、アメリカ全土にわたる一般地方紙、書評紙に混じって、Vogue, Elle, Vanity Fair などの誌名が見えるのが興味をひく。Vogue　と言えば、イギリス版の話だが、「・・・その（ウルフの）エッセイや写真がヴォーグ誌の誌面を飾る、時代のセレブリティになっていった。」こともあり、メリル・ストリープ、ジュリアン・ムーア、ニコール・キッドマンという三大女優揃い踏みの映画への興味が、この作品への様々な関心をかきたてたことは想像に難くない。その辺の、ウルフの商品化の事情は、前出『ダロウェイ夫人』訳に付けられた松本朗氏の解説に詳述されている。

（７）The Hours, Harper Perennial, 2006, p.157
（８）同上、p.39
（９）Virginia Woolf's Nose, Hermione Lee, Princeton University Press, 2005
（10）～（13）“Michael Cunningham Rewriting Woolf:Pragmatist vs Modernist Aesthetics”, Birgit Spengler, Woolf Studies Annual, vol.10, 2004, p.72
（14）『めぐりあう時間たち』高橋和久訳、集英社、2003年、282頁
（15）（７）に同じ、p.40
（16）同上、p.150
（17）（14）に同じ、283頁
（18）The Virginia Woolf Reader, ed. by Mitchell A. Leaska, Harcourt, 1984, p.193、ここで、ベネット研究について少し付言したい。本年、北海道大学において開催された第86回日本英文学会全国大会でのシンポジウム「ミドルブラウという名の挑発」において、井川ちとせ氏による発表『「文学趣味」、自己改善、ミドルブラウ、Arnold Bennettと読者たち』がなされた。ともすれば、Bennett vs Woolf　という図式で見られてきたベネットの位置が、そのような単純なものではないことに気づかされる示唆的なものであった。
（19）（４）において取り上げた『船出』の序文p. xxiにおいてカニンガムは、ウルフが、作家人生において常に引きつけられたのは、『オーランド—』（作中において、ウルフが描いたのは、普通ではないヴィタ・サックヴィルウエストだった）を除いて、普通の人々の人生であった、とした上で、その証左として、『ベネット氏とブラウン夫人』をあげているのは、カニンガムのブラウン夫人という名前の選択の背景を示すものでもあろう。
（20）Virginia Woolf, Hermione Lee, Vintage Books, 1999, PP. 396 ～ 411
（21）The Common Reader 1, Virginia Woolf, The Hogarth Press, 1986,ここにいう「ふつうの読者」とは、ジョンソン博士のLife of Grayからの引用に基づくもので、ウルフによって「批評家や学者ではなく、教育もそれほどなく、天賦の才にも恵まれているとは言えない、自分の楽しみだけのために読み、知識をひけらかしたり、他人の意見を正そうとしたりしない読者」のこととされている。さらに、付け加えるならば、The Uncommon Reader, Allan Bennett, Faber and Faber, 2006も思い出される。この場合, “uncommon reader”は、第一義的にQueen（エリザベス二世）を指しているのだが、ウルフの上掲書の題名を意識していることは明らかであろうし、そのuncommon reader である女王は、まさに、ウルフのいう普通の読者として、読書の喜びに目覚めていく様が、実に微笑ましく描かれていく（ヘンリージェイムズやら、プルーストを読む彼女の素直な反応！）のをみれば、作者の題名選択の意図はうかがえるというものだ。彼のウルフへの関心は、2003年のテレヴィドラマ、Me, I'm Afraid of Virginia Woolfというタイトルにもうかがえるが、残念ながら映像は未見。脚本（1985）の内容は、ポリテクニックで（大学ではないことを母親に責められながら）、年齢も性別も人生の背景も種々雑多な学生（ウルフやフフォースターのポスターにいたずら書きをするような者も含まれた）を相手に、ウルフやらフォスターやらブルームズベリーグループについて空しく語る比較文学の教師ホプキンズは、常に本（視線を向かわせる対象として）を携行し、同じ学校のヨガ教師のガールフレンドもいながら、自分のクラスの男子学生への恋心を抱く、といったものである。その点からみると、その題名を借用？されたオルビー作品よりは、ウルフとのつながりは明白といえるかもしれない。
（22）この件に関しては、Mrs. Woolf and the Servants, Alison Light, Penguin Fig Tree, 2007に詳しく、同書はまた、イギリス社会におけるservantsという存在の歴史としても実に精力的な研究書である。筆者による書評が『ヴァージニア・ウルフ研究第27号』所収。
（23）、（24）The Hours、p.226

（25）同上、p.220

（26）Mrs. Dalloway, Virginia Woolf, introduction by Ellen Showalter, Penguin Books, 1992, p. 213 , なお、この版において序文を付けているShowalterは、この作品の映画との関連についての指摘をしており、また、ウルフには、“cinema” という小論もあるが、その点からの検討は、また、改めることとしたい。

（27）2003年6月、Smith Collegeにおいて、第13回国際ウルフ学会がWoolf in the Real Worldと銘打って開かれ、そのシンポジウムの一つはThe Hoursをめぐるものであった。その参加者の多くはフェミニストであり、ウルフ支持研究者（pro-Woolfian）たちだったという。その中での、Daniel Mendelsohnの発言。彼は、New York Review of Books において “Not Afraid of Virginia Woolf” と題する、カニンガム（原作）、ヘア（脚本）、ダルドリー（監督）それぞれの異なる脚色について示唆的な記事を書いていて、その内容「（映画版は）自信に満ちた、噂話の好きなブルームズベリーのクイーンだった彼女、いきいきとした社交的女性、面白い日記の書き手、びっくりするほど健筆なジャーナリスト、そして、仕事上の義務や関係を巧みにさばく、といったウルフ像を伝えていないし・・・もし、伝えていたとしても、映画のウルフ像は実像の半分しか伝えておらず、あとの半分は、サッフォーの昔の伝記に戻るような、創造的女性というのは、正気ではなく、孤独で、呪われた存在という、まるで、一致しないものになっている。」は、“Virginia Woolf in the USA” において、Mark Hussey によって引かれている。Woolf Across Cultures, ed. By Natalya Reinhold, Pace Univ. Press, 2004, p.55

（28）、（29）、（30）Virginia Woolf’s Nose, p.61

（31）“Virginia Woolf”,　Indigo Girls, Rites of Passage, 1992所収、なお、このアルバムの最後、順不同に、実に様々な人々への（中には、エイズと闘っている人々とか、銃規制支持者とか）献辞のあとに、ウルフ『ある作家の日記』の一節が引かれている。それは、1927年6月、ウルフが、夫、ヴィタ・サックヴィルウェスト、ハロルド・ニコルソン夫妻、クゥエンティン（姉ヴァネッサの夫）の総勢5人で、日食を見に出かけた日からの以下のような抜粋である。「・・・それ（日食）は、1999年までもうないのだ。残ったのは、いつも慣れ親しんでいる慰め、すなわち、光と色がたくさんあるという感覚だった・・・しかしながら、いったん、その感覚が戻ると、暗闇の後に、それが戻った時に感じた安堵と休息の感じがなくなったことを、むしろ、寂しく思うのだ。」、A Writer’s Diary, Being Extracts of the Diary of Virginia Woolf, ed. By Leonard Woolf, p.111, この1927年6月30日の記述からの借用として、歌詞の中に見られる語は、eclipse（日食）しかない。その歌詞は、「月が、太陽と地球の光を飲み込み、川があなたの命を覆い尽くした（eclipse）けれど、あなたの魂を、小瓶に詰めたメッセージのように私に送ってくれたのは、あなただった・・・」とある。この歌の存在は、先述のウルフ国際学会の発表の一つ、“In the Footsteps of Virginia Woolf: The Hours by Michael Cunningham”, Laura Frances Aimone, in Woolf in the Real World, Selected Papers from the 13th International Conference on Virginia Woolf, ed. By Karen V. Kukil, Clemson University Digital Press, 2005, p.163によって教えられた。

（32）Voyage Out, introduction by Michael Cunningham, p. xxxvii

（33）『ダロウェイ夫人』光文社古典新訳文庫、解説・松本朗、346頁

書誌

Virginia Woolf: The Voyage Out, introduction by Michael Cunningham, Modern Library Classics, 2001
Mrs. Dalloway, introduction by Ellen Showalter, Penguin Books,1992
The Virginia Woolf Reader, ed. by Mitchel A. Leaska, Harcourt, 1984

A Writer's Diary, ed. by Leonard Woolf, Harcourt, 1953
The Common Reader 1, Virginia Woolf, The Hogarth Press, 1986
Michael Cunningham: The Hours, Picador USA, 1998
The Hours, Harper Perenial, 2006
David Hare: The Hours, a screenplay based on the novel by Michael Cunningham, Faber and Faber, 2003
Edward Albee: Who's Afraid of Virginia Woolf?, New American Library, 2006
The Indigo Girls: The Rites of Passage, Sony Music,1992
Alan Bennett: Me, I'm Afraid of Virginia Woolf, Faber and Faber, 2003
The Uncommon Reader, Faber and Faber, 2008
『ダロウェイ夫人』、土屋政雄訳、解説・松本朗、光文社古典新訳文庫、2010年
『めぐりあう時間たち』高橋和久訳、集英社、2003年
『エドワード・オルビーⅠ、動物園物語、ヴァージニア・ウルフなんかこわくない』、鳴海四郎訳、解説・一之瀬和夫、ハヤカワ演劇文庫、2006年

Hermione Lee: Virginia Woolf, Vintage Books. 1999
Virginia Woolf's Nose, Princeton University Press, 2005
Alex Zerdling: Virginia Woolf and the Real World, University of California Press, 1986
Woolf in the Real World, Selected Papers from the 13th International Conference on Virginia Woolf, Clemson University Press, 2005
Woolf Studies Annual, vol. 10, Pace University Press, 2004
Woolf across Cultures, ed. by Natalya Reinhold, Pace University Press, 2004